

繪本通俗排悶錄

前卷

六

登
淺

遠
1.192
6



告白

凡そ此の巻中見返ハ勿論其他ありて聊の余白あれば
或ハ猥褻なる畫圖を寫し或ハ卑俚ある語辭を書し
其の甚しきに至りて挿圖を彩りて却之を流さのみならず
塗抹して以て其の何れを解さる能はざる者あり
何ぞ其れ思はざる其甚しき乎夫れ此書籍ハ我が貸し
以て業とあり所のものなり故之を流がさるふ於て頗る
營業ハ損害あり營業ハ損害あるに於て之れ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此小告白し置と云爾

新稿 長門屋主人識

長



遠門

1192
氏送小女を昇と家小婦ますの姜が訟し成彼と邵氏始と福が不肖

甚くは行方無ありて姜女趙家羅の至と始と皆の欺
る然知と大の哭し死せんとす我趙慰め諭せども聴ど威
を以て逼る益罵る怒と鞭うてども終小服せども并を抜と自喉
を刺ぬ急と救と共己の食管の透とこれ血溢さがる事かま
趙帛を以て其頸を束ぬ猶冀ハ從容小之をるびんと必下と然
小立日牒至とくるが姜秀文の趙趙羅さるのるま物もせま
往たり官女の傷の重を驗玉ひと命と趙を召とさる小隸相共
小目をくせと更小刑を用ひむ趙が官趙趙羅が横暴を人く彼
居を大の怒と家人を喚かして立とる小捷と存と斃とる姜
氏送小女を昇と家小婦ますの姜が訟し成彼と邵氏始と福が不肖

非問録卷之四

の状を知りて。號哭して息絶る。至る。弟の禄時。小年十五あり。只一人のやもこ成る。死方なり。是を先代仲が前室の生る女。大娘とて。わが。遠郡の嫁。一往する。其性剛。男のやもこ。歸寧して父と忤。憤り。帰る。父の仇。仲も之を悪。且。道中。遠を。年を経。存問も為さる。邵氏危。望。風。大娘を招。必定争ひを起。商人の便。寄。大娘。告遣。果。大娘。少子を挈。至。門。入。幼。一人母の看病。居。家の。寂。弟の福。と。向。禄。倫。之を告。大娘。怒。氣。叱。塞。曰。家。小。成人。無。斯。や。人の。蹂躪。至。吾。家の。田。産。諸。賊。何。ぞ。賺。め。る。

る。成。得。んと。念。と。出。邑。請。状。を。呈。諸。博。徒。大。小。俱。と。金。を。出。大。娘。大。娘。其。金。を。受。之。を。訟。邑。令。博。徒。の。何。某。等。を。拘。各。杖。を。加。田。産。の。事。ハ。置。向。大。娘。大。娘。子。を。牽。郡。守。小。訟。郡。守。最。博。を。惡。玉。入。上。大。娘。委。く。寡。の。家。の。力。悲。又。惡。徒。共。の。工。逢。一。次。弟。を。述。れ。郡。守。大。小。動。書。付。を。以。詔。率。命。田。を。以。仇。氏。返。給。仍。仇。福。を。免。不。肖。を。做。め。邑。宰。奉。と。穿。鑿。あり。之。を。故。の。産。盡。返。大。娘。已。久。寡。乃。少。子。を。遣。家。小。歸。且。從。兄。小。囑。業。を。務。復。來。る。事。あり。と。云。付。此。母。の。家。小。止。居。母。を。養。弟。を。教。内。

外より治く母の心大に慰く。病も漸瘥る不至まじ。家務ハ采女大娘
 小委ねるも。里中の豪強少く凌暴せんとはまじ。大娘刀を取く其家
 又至まじ。争ひ論じく。屈服をせざる事なり。斯と年々まじく。細産日
 小増豊ふあり多。時々薬餌珍育を買く。美女のゆえ。魏王遣る。
 又禄が長成せるを見く。頻に媒小囁く。之が為小婚を不見ぬとま。魏
 夙人の告く曰。仇家の産業悉大娘小属せり。恐らくは将来復返す
 と云まじ。人皆之を信し。婚をせんと云者あり。此小范公
 子文と。字ハ氏子文ハ。云人。有。家中小名園あり。晋第一なり。晋の中あり。其
 園中の名花路を夾く。直に内室小通せる。或人知らざり。誤く。園小
 入。公子の私宴の處。小至まじ。怒く。執へく。盜ありと云まじ。杖ゆく。

死ぬる打しめ。事あり。時小清明と。二月の節あり。禄師の家
 よも。帰るも。魏夙誘く。共小遊びく。彼園の所。小至まじ。魏のとよむ。
 園丁を相知く。けし。園中へ入。免る。調く。亭榭を。和名抄云亭ハ
 阿ラマ。同書。臺榭ノ注。土高。歴く。一處。小至まじ。溪水。白勇。く。画橋。朱檻
 曰。臺。有。屋。曰。榭。和名。ウテナ。ありの。一の。漆。門。小通。せる。遙。小門。内。を。望。め。繁。花。錦。の。如。し。是。公。子。の
 内。齋。あり。魏。之。を。給。く。曰。君。請。先。入。小。我。彼。處。あり。病。用。く。往。ん
 と。く。別。色。ね。禄。心。つ。を。往。る。小。一。院。あり。と。く。女子。の。笑。声。聞。こ。ゆ。一。人。の。婢
 小く。窺。見。く。即。返。入。ぬ。禄。始。く。駭。奔。ら。ん。と。ま。ま。公。子。出。来。く。家。人。を
 叱。く。之。を。逐。へ。ま。禄。大。に。窘。ら。ま。り。む。せん。と。無。く。自。笑。中。小。身。を
 投。ぐ。も。公。子。怒。を。返。く。笑。と。る。諸。僕。小。命。く。引。出。さ。せ。其。容。の。都。雅



本繪像



大娘 躬往く
 仇家の 衰へん
 救ふ

ちる衣又よく其衣履を易き也。其姓氏を問く殷勤を盡せり。俄み趨入
 と申す。旋出く打咲つ。禄がひを握く漸量の所不達る。禄遠巡
 としと敢く入らざ。公子強く曳く入る。北離の内隠々と美人
 わりく窺ひつ。わりく居る。既み坐まを群の婢酒を進む。禄辞し
 と曰。童子知無し。誤く園圃の入りぬ。赦宥を蒙まらる。外不
 出。但願へくを釋し。還し王の恩を受る事浅か。と云へ。公
 子聴く。暫あましく有。笑紛紜。言。禄又起く十分の酔る。と辭す。
 公子強く坐せ。め笑く曰。我句あり。若此句の對を作さ。君を放ち
 と歸らしめん。禄其句い。んと向ふ。公子曰。拍名。渾不似と。禄黙思
 とる。良久く。對く曰。銀成。没奈何と。樂器あり。没奈何。石の

公子大ぬ。矢矢と。真の石崇ありと云。晋の石崇。字。季倫。と云。入め。玉像
 禄公子の詞を解せ。是々公子の女あり。名。蕙娘。といふ。美ゆ。とく
 書を知らず。良稿を擇ん。と云。昨夜の夢。一人告く曰。石崇ハ
 汝が婚する。と云。何れ在る。と向ふ。明日水。小落んと云。起く。父の
 吉と共。異なる。と云。禄。夢兆。符々。斯。邀く。内舎。め
 入。夫人。女。葦。と云。共。硯。へ。め。る。公子。喜。く。曰。拍名。小。女。が。擬
 てる。所。ゆ。め。く。屢。思。へ。ども。其。偶。無。し。今。属。對。を。得。つ。る。亦。天。縁。あり。と
 僕。息。女。を。以。て。其。帚。小。奉。せ。ん。と。也。箕。帚。ハ。妻。子。の。象。也。と。云。寒。舎。に
 卑。下。し。と。云。第。宅。め。乏。く。引。取。り。及。不。と。云。家。も。廣。げ。ま。な
 ま。居。る。と。云。禄。惶。然。と。と。辭。し。と。曰。今。家。小。老。母。わ。と。病。め。り。

入贅と成事能へどと云ふ公子姑歸と謀り王へと。遂に園人を遣
 と湿衣を負せ馬に乗る歸り。禄歸り来ると母の告げ。母
 驚ると余りある不祥と。是れ至りて始と魏氏が公の恐し死
 を知りぬ。さしど色凶因りて吉をえ。其後おさし置く。斯る者
 ろ遠ざかりと交る夏勿とと母戒る。數日を踰る公子又人を来ら
 しめく母の言ハハハ母終る。大娘之を應る。即二人の媒を借
 と納采の禮を有。日を撰る公子の家へ入贅と。年比有と禄
 學問の長才名も世に聞え。妻の弟生長しけ。大娘
 禄婦を携りて家へ歸り。母病少く息と杖を倚りて歩行せ。大娘
 の經紀頼りて第宅も完る上。新婦へ来ると婢僕雲の如く。さうさう

大家の風ありけ。魏之をえと益嫉めども害を送る。益をわねし
 時、巨盗あり。事発ると遠地へ遣らる。時、禄は財を倚りて誣せ。是
 ら魏が計る所あり。禄は関外へ。外へ追放と。徒らる。益をわねし。大娘
 田産の盡没せし。と官庫へ入る。危公子上下の賄り。僅に蕙娘
 を免し免る。幸に大娘産を折の書を執りて。官へ申し。母子
 火を免る。新増せる良田許り。悉福が名あり。けし。母女
 始と安し居る事を得。禄又え返る。身ありと思ひけ。母女
 離婚書を寫し。岳家へ遣り。獨北都をゆり。とぞ往々。旅肆の戸外
 小巧子のをわく。と見え。貌よく兄に類せ。近づくと問。果して
 兄ありけ。兄弟相共あり。取り取り有。とる。答。語り。位あり。禄衣を

解金を分て福小與へ早く家小歸せ玉と云ふ福之を受て泣々
別とぞ往々。祿の關外小至と將軍の帳下小
一卒と成し。が文弱ちまは文籍のる成主ぞうめ諸僕と同く棲
し。僕が軍相共小家世を研問夏ふし。小祿悉之を告るまは内一人
驚と是吾見ちると云ふ。是ハ父ある仇仲弟。初め殺小
捕ら馬を牧と有り。が冠逃竄去と後遂に關外小徙と。將軍の僕
とあるとけり。祿と向と其由を悟まは始と真の父とる。の成知。首を
抱と悲哀。且相喜と。幾とくもわとく。將軍巨盜數十人。代獲
けり。内の一人の曩の時魏の頼やと。祿を誣とる盜魁あり。これを。父子泣
泣將軍の誼。將軍之が為小寛を雪。が上聞小達し。けと。上り。地方官

命せと。没入し。る仇氏の細産を返し玉へる仇父子喜ぶ事
限る。祿と旅装とて。歸せと。杖兄ある福小別と。家小
歸り。蒲伏し。入る大娘母を堂上よ坐せ。め杖を取と。福小向と。曰
責を受んと。願つ。姑留むと。然と。ぞんを早と。福泣と。地小伏
。願と。答を受んと。云大娘杖を投すと。曰。婦を賣程の人あると。
懲むも足ら。宿案未消せと。若再犯と。官よ。首先
と。即人を遣と。美女小告と。美女罵と。曰。我を仇氏の何人と
必ひ玉ふ。あつ。の成。聞知と。と。と。と。大娘此の成折と。言と。
福を。あ。げ。と。福。慚と。敢と。言と。居る事。半年と。
大娘福小衣食等を惠む。の。丁寧と。と。役を。と。む。

僕わがと同おなくせせるる。福ふく出い精せい一いつといいささらら怒おこめるる色いろあり。金かね銭せんををわわららええままをを
 共とも聊りょうもも苟こああららむむ。大おほ娘むすめ其その他ほか無なきき察さつ一いつとと母はは白しろし。姜きやう女によをを求もとめ
 るる復また歸かへせせししめめんとと云いふふ母はは恐おそららくくををののええ返かへしし難たがううんんとと云いへへをを大おほ娘むすめ
 曰いは然しかもも彼かの女によ。二ふた主ぬしはは事ことるる心こころああららずず。曩なのの自みづか害げとと云いふふ理ことあり。然しかもも大おほ娘むすめ
 福ふく小こ賣うりままささららるる。公こう無なきき非ひトトとと云いふふ。大おほ娘むすめ遂ついに小こ福ふくをを率ひらくく。
 躬みづか往まりり負おん判はんををちちきき。岳たけ父ちち母ははききびびくく福ふくをを責せめめとと云いふふ。大おほ娘むすめ叱なりり張はりり
 跪ひざませせむむ。斯しかとと姜きやう女によ小こ見みええししめめんとと云いふふ。再また云いふふ共とも女によ出いでで。大おほ娘むすめ内うち
 小こ入いささりり捉とめめくく之これをを出いささすす。女によ福ふくををええくく罵ののりり責せめめむむ。福ふく汗あせををむむららすすくく
 居いるる小こ堪たむむ。姜きやう女によ母はは始はじめとと福ふくをを見みてて犯とがすす。大おほ娘むすめ歸かへるるをを見みてて日ひをを問とひひ女によ
 がが曰いは向むかひひのの惠めぐみをを受うけけ。事こと厚あつし。今いま尊たうとん命めいをを受うけけ。豈いか異い言ごんありん
 異い言ごんありん

や但ただ恐おそららくく。此この人ひと欺あやままるるのの公こうをを保たもつつ。能あたへへどど且かつ恩おん義ぎ已すでにに絶たつつ。
 何なにぞぞ腹はら黒くろむむ。無な頼たの子ことと共とも世よをを渡わたるる。金かねやや願ねがははくく。別べつ室しつをを構かまええ。
 妾めかけをを置おけけ。王わうのの往むかひひ。老らう母ぼ小こ事ことへへんん。然しかもも尼にとと成なるる。勝かちりりとと云いふふ。大おほ娘むすめ
 福ふく代しろとと後あと悔くわいをを述のたまふふ。翼よく日ひとと云いふふ。約やくををああららすす。歸かへるる。翌あした日ひ乘のり輿こしをを遣やりり
 とと姜きやう女によをを乘のりり歸かへららしし。母はは門かどのの立たてて迎むかへへ。跪ひざませせむむ。拜かみををまますす。女によ八はち地ぢ伏ふくしし
 とと大おほ娘むすめ哭なむむ。大おほ娘むすめ之これをを勸すすめめ酒さけをを出いささすす。歡よろこびびををたたむむ。福ふくをを案あんのの側かたにに坐ますす
 せせむむ。大おほ娘むすめ爵しやくをを執とりり言いふふ。曰いは我われ苦くる争あららむむ。一いつ人ひと自みづか利りををまますす。非ひぞぞ今いま
 弟あに過あやままるる。悔くわい負おん婦ふ復また還かへるる上うへ。簿ぼ籍せきをを渡わたしし。ややああららせせんん。我われ一いつ身みをを以もつつ
 来きりり。仍さらびび一いつ身みをを以もつつ。去いるる。夫おつと婦めかけ席せきをを犯とがすす。犯とがすす。改あらためめてて拜かみ
 一いつ泣なむむ。止とむむ。大おほ娘むすめ夫おつと婦めかけがが止とむむるる。任まかせせしし。止とむむ。居いるる。月つき成なるる。経つとむむ。

く 禄が寛の頭とる命下り。數日あるごとく田宅悉故主の還りぬ。魏大の駭とく其故を知りて自術の復施を乞ふるの無を恨み時よ思ふも西鄰の火あわよく焚出ぬ。魏火を故ふるに託しとく往く暗の禄が家の火をつけと焚えんと風暴起り延焼しと大方焼盡せり。止福が居西三屋を餘せり。家拳と其中の取衣ととぞ居る。斯る程ぬ禄歸來とるに皆く相見と泣喜るの甚初め危公子離書を得と蕙娘ぬ見せると。蕙娘痛哭と引裂と地の廢り父其志ぬ従と復嫁を言どとくありぬ。禄歸と女のやと嫁せと彼と喜と岳の呀の往ぬ公子其家の焚とるを知りと。留んとと共禄辞とく退死歸ぬ大娘幸の蓄へ金わととるに敗る堵をつくりとる福鋪

を買とく自營業とく。鏝を埋し窖の掘わとぬ夜弟と共之を發け石池一丈計ぬひと盈貯へると。是ぬ由と工ぬ命とく大に樓舎を作る。壯麗あるの類あり。禄を將軍の義ぬ感と千金をそまると往と父を贖へんと。福我あそ住ぬとと。清と出立けと。健ある僕を添と遣ると。禄ハ蕙娘を迎へと。昔の如く睦しと居ると。我むくねととと父兄同く歸り來ぬ。門の飲ひ言ぬ思ふや。大娘母の家ぬ引裁せとと。我子を禁と來ると。私わると人の疑はんるの恐とと父既ぬ歸ると堅く辨しとと。去らんと云へぬ。兄弟之を聽者あり。父乃縫を云ぬ折と。二を兄弟ぬ與へと。大娘ぬ與ぬ。大娘固辨しと受と。兄弟泣と日吾等姉のたにさる争今日

わんと云く。強く之を勧む大娘漸わやく。兼引ぬ其子子を招
 きく家小移しく共住けり。或大娘小向異母兄弟の為小志然
 尽さ事何ぞ斯むる切なるや。大娘曰母有る事を知く父有る事
 知らざる。是禽獸なる。豈入りし之の效らんやと云ふ。福祿之を
 皆流を流せり。工人をしく其弟を作らせり。悉已と等く建つ
 けり。魏風自思ふ十餘年以來仇家小禍を成えとしくる。皆福との
 成る。深自愧悔。又其富を仰ぎ。之と交を為えと思
 へり。種々の品を仇仲が方小持行く。賀を述べ仇仲を雞酒の受
 けり。此雞布を以て足を縛り。有しが。逸して寵入る。其布
 火つた。然る小其儘飛り積る薪の上止まり居る。其散りて

焚あがり。舎小火は死ぬ。幸小人多くわやく。撲滅けしども。厨中の
 器物ハ皆焚失ぬ。其後仇仲が壽の賀の時。魏又羊を贈り来り。
 之を返えとせし。共かあざし。羊を庭の樹小敷に置る。夜僮
 の僕小毆まらる。念く樹下小往る。羊の索を解り。経て死小けり。兒
 嘆トく。其之小福なる。之小禍なる。如ぞと云く。其後魏が方小
 小殷勤。言れども。其ち小一を小受けり。後魏老く貧く
 しく。巧と作せし。憐る。布粟る。小惠を與へ。恩を以て報る。
 童氏犬

咸溪地。の童。鑪が家。小二犬を畜する。一ハ白く。一ハ花ちる。共小一母犬の
 生む所。性狡。獵しく。人の意を知り。後白犬忽目亡。盲なる。

依^より牢^{らう}み入^いり食^く事^じ能^よへど主人^{しゆじん}草^{くさ}と簷^{えん}下^か籍^{せき}と臥^ふき^む花^{はな}犬^{いぬ}
日^ひに小^こ飯^{いひ}を啣^{くは}む。往^ゆく吐^はく之^をを飼^かひ。夜^よは其^{その}側^{かた}に臥^ふき。白^{しろ}犬^{いぬ}死^しみけ
れ。主人^{しゆじん}之^をを山^{やま}の麓^{ふもと}に埋^うる。花^{はな}犬^{いぬ}朝夕^{あさゆふ}往^ゆく其^{その}處^{ところ}を遠^{とほ}う。救^{すく}廻^{まわ}と
泣^なき拜^ひする。其^{その}傍^{そば}に臥^ふき時^{とき}を移^{うつ}り返^{かへ}り去^さると死^しん



通俗排悶録卷之四了

通俗排悶録卷之五

高誼之部

目錄

熊公

武林高士

張文

雪遘

董繼芳

新安商

陸采侯

王福徴

旅次監生

哈九

黃中

寶葵生傳

合十二種

通俗排悶録卷之一

高誼之部

熊公

六樹園翁 全亭正直 校 譯

熊公廷弼と云入江南地名の習字の習字習字の時時書生等の文章を長机の上
 小並べ置き左右小酒一盃と劍一口を置てて小筆を執り讀みるを批判
 けり。其中小佳文章よ又閱みわるる時時大白ゆく酒を飲み此を賞す
 の袖を巻を讀め劍を抜き振廻し情の辭を暗しけり。斯公を用ひ
 たる小依り江南の内内馬才馬才碩学碩学の者者埋まる者者一人一人もろりりけり。名
 高高元元吳吳名名の馮夢龍馮夢龍も其門下其門下よりより出でる。此夢龍此夢龍ハ戲作戲作をも好あむ人人
 也。桂枝兒桂枝兒の小曲小曲葉子葉子新聞譜新聞譜ちと云物物皆此人の作作り。淳博淳博の子弟子弟

父兄大い怒りし。夢龍が所為を問ふ。口こ小要路の執政の人より人小許み此吏
 夢龍が身の上か。程のよろけは。夢龍甚迷惑し。其時熊公
 告暇し。家小居らば。夢龍急死舟を西江名小後へ熊
 公の許小来り。熊公小見え。は吏の治らん。成替へんと。ひけり。いせご
 口より出さる。先小熊公不圖言出さけり。當時世小足下の桂枝児の
 曲を盛不称美さる由聞及り。若携へ玉り。老夫小三冊を惠めんと望し
 夢龍大い赤面し。答へん言も無。唯恐と入居り。漸その
 るあまえく。の吏起り。依救を蒙らん為。遙くは。泰アと申
 一けし。熊公は。易なる。ひく。取計へ。心遣ひ有べ。先

飯をまのせんと。暫わく。咄魚と。熊鷹を粟飯小添く。出さ
 夢龍ハ斯る悪食小あは。食かみと居り。熊公曰朝夕
 美味珍羞を茹く。食ふ。呉下の書生の風を。斯る鹿食の
 呢下を待た。如何なる。丈夫なる者。飲食小美悪を論と。兼
 食ふも。飽や。食ふも。真の英雄。いざ相伴せん。其品
 を残ら。食盡さ。夢龍も為方。強く著を取。食けり。
 熊公座を起。奥へ良有。書一通を持。云我故人某の許へ。歸路
 の便小。玉を。忘る。吏と云。夢龍曰。此度の救。免ん。瓜
 求む。い。熊公。口へ。む。づ。一の冬。瓜を。贈の。と。互
 此冬。瓜重さ。数十斤。わ。夢龍。受。意。快。本意。

立如し。冬風の重なる堪多。うち捨て船を帰け。漕舟して數日を
 経く。大なる湊に至く舟を泊す。熊公の書簡を寄らまはす。人の家も茲
 有りけし。人々も届させ居ぬ。其主人自身舟へ有りて夢龍又
 逢即案内し。其家に至す。席不就と齊く。山海の珍味をわし。妓女
 數多來り。舞謠て酒を遣む。酒筵終り。後主人夢龍に向て曰。先
 生の文章才辨。誠無比類す。天下の人皆相識成らざるを願へ。今日
 計らきて光臨し。多の更上も有る幸す。誠天より奇縁を結びたる
 あり。然まもも當地と貴國と。遠隔る。殊に斯る苦しむるを
 久く留り奉り。かこ。輕微の賤別を從者や。送上致せり。とる夢龍
 へ始終かき。解せざること。先丁寧に謝し。暇を乞く舟へ歸ま。白銀

三百兩先達と。昇居る。則主人の賤あり。叔家へ歸りける。彼許へ
 らま。熊公の當路の人。飛札を送ら。こころ力より。早
 事穩便。小静ま。た。夢龍へ始て安む。熊公の恩の感。とる。
 熊公元來。夢龍を愛せ。とる。夢龍餘才を顯へ。名をか。や
 か。戒めんと。と。と。廉略。めりて。と。滅。富人の。借
 財を助け。難儀の筋をも。入知。と。英豪の。人の
 測知。と。斯の如し。

武林高士

嘗孝廉。名。必。吳郡。名。徐昭。と云人死せ。時貧窮。よ
 しく。葬を管むる。と。難かり。其友武林。名。高士。何某。口巾。以。來。と

此件をえん。葬すの事を一人し引受て。此人も又負く。貯るるもけしきも。元來八分を善く分け。其近邊の家を貸し書を書き。其直を積く此支を。遂行んと謀す。其國の人。此由を告げ。其高義を尊そ。我もくと買つる程。忍數十金を得。乃日を止。葬す。其餘る金を徐昭子。喪中の入用とせしむ。何某云々。吾富人の請り。是程の金借来らん。日取易く。先生の靈恐ら。悦ぶる依く。斯ハ謀ひしと云々。其姓名の傳はるる。惜むべし事あり。

張文

揚繼宗 揚氏繼宗 刑部主事の官 河間府 時 河間府 地 河間府

一人を捕へ。張文郭禮と云二人の者を付く。彼盜を敬護し。京都へ上せ。此盜途中。夜の間に枷を引切。遁去る。翌日二人大に驚き。張文郭禮は向く云々。凡盜を取。其罪盜と同罪。吾等二人皆死罪を遁る。汝死せば老母も亦死せん。吾の盜あり。吾の老母有と兄弟あり。汝死せば老母遁せ。左わが吾入死。汝母子二人を助。郭禮涙を流し。謝し。其計の如く。刑部へ指す時。揚繼宗張文が言語。動止盗。張文が義を感。二人共釋。其真の禮實情を白状。繼宗張文が義を感。二人共釋。其真の

盗も不日捕へりて是けるを。

雪遣

海寧地名の查孝廉名を培字伊璜字と云入也。文才人又勝也。氣象俗らざり。世人の皆俗なるを厭ひて。格外なる處を尋とて。真の豪傑ゆゑのめと。常め言ひける。或日只獨酒飲と居る。折一も歳の暮ふと。大雪頻ふ降る。孝廉此景色を獨賞せんも本意する。門をかく四方城望ふ。乞食一人廡の下に立居る。孝廉熟くと見く。此凡人の非と。呼く伴ひ入ると問く。曰此項人の噂を聞ふ杖をもつて物もいへず。敝たる衣服を着く。然も空腹なる。饑寒なる顔色もせむ。異名を鐵丐といふ者あり。と聞及ぶらば汝と問く。然と答ふ。酒呑やと問ふ。能飲候と答ふ。

孝廉侍童命しく。大器の酒を酌と與へしめ。忽飲盡し。孝廉大喜と重と酒を煖め。鐵丐も約しく。曰汝其大器を飲べ。我ハ此厄めく飲んと。酒盛を始る。かの鐵丐も大上戸めく。大器を二十杯餘飲とせむ。醉ふ氣色もする。孝廉ハ既ハ醉と仆と臥せり。侍童等肩を掛くと奥へ入ると。鐵丐も出た。又廡の下に歸と其夜を明し。翌朝孝廉目を醒し。家内の者も云る。昨日鐵丐と酒を飲と。甚樂し。彼が着る藍縷ゆ。此寒氣を禦んと。自身の綿入と出ると與へせ。彼鐵丐其服と着し。孝廉ハ禮謝をもせむ。何因とも无と云。明々孝廉ハ杭列名の長明寺名と云ふ。寓居し。二月の初ふ友人少く打連酒を携て。西湖名遊び。時。故鶴

亭（林）の傍（り）に又彼鐵巧（てつこう）は遇（あ）へる。其体（そのてい）玄冬（げんとう）の版（ばん）ありて。又先（また）の如（ごと）く藍瘦（らんしゆ）あり。孝廉（こうれん）彼鐵巧（てつこう）と伴（とも）て寺（てら）に歸（かへ）り。綿（わた）入（い）る如何（いか）せしと問（と）けし。最早（もともと）春（はる）ぬるり。暖（あ）るまじ。賣（う）り酒（さけ）を飲（の）むと答（こた）ふ。孝廉（こうれん）面白（おもしろ）く。書（か）を讀（よ）むと問（と）ふ。書（か）を讀（よ）むと答（こた）ふ。考（こう）廉（れん）驚（おど）く。弥（な）常（じょう）人（にん）と問（と）ふ。林（りん）浴（よく）せし。衣服（いふく）を改（か）着（ちやく）せ。其姓（そのせい）名（な）生（せい）所（しよ）を問（と）ふ。巧（こう）者（しや）答（こた）ふ。僕（ぼく）姓（せい）吳（ご）古（こ）の陳（ちん）平（へい）が才能（さいのう）と慕（あこ）む。奇（き）計（けい）と後（ご）と敵（てき）と呼（よ）ぶ。名（な）と六（りく）奇（き）と對（たい）り。代（だい）々（々）延（えん）陵（りやう）名（な）在（あ）る。後（ご）與（よ）名（な）人（にん）賞（しょう）し。六（りく）奇（き）と呼（よ）ぶ。徒（た）中（ちゆう）早（そう）く父（ふ）兄（けい）を失（う）ひ。僕（ぼく）博（はく）を好（この）む。家（か）産（さん）を傾（か）け。遂（つい）に巧（こう）者（しや）流（りゅう）浪（らう）。此（こ）邊（へん）へ來（き）たり。熟（じゆく）く思（し）慮（りょ）する。昔（むかし）の賢（けん）者（しや）と時（とき）に遇（あ）はさむ。乞（こ）食（じき）とある。人（ひと）往（むか）む。僕（ぼく）が如（ごと）き者（もの）乞（こ）食（じき）とある。恥（ち）ぢを感（か）ず。然（しか）る所（ところ）。

告白

凡（およ）そ此（こ）の卷（くわん）中（ちゆう）見（み）返（へん）ハ勿（な）論（ろん）其（そ）他（た）み。聊（りやう）り余（よ）白（はく）あれ。或（ある）ハ猥（わい）褻（せつ）たる。畫（え）圖（ず）を寫（か）し。或（ある）ハ卑（ひ）俚（り）ある。語（ご）辭（じ）を書（か）し。其（そ）の甚（しん）しき。至（いた）りて挿（さ）圖（ず）を彩（さい）りて却（か）之（を）を流（りゅう）すのみ。至（いた）りて塗（ぬ）抹（ま）して以（も）て其（そ）の何（なに）を解（かい）する能（あた）らざる。至（いた）りて者（もの）あり。何（なに）を其（そ）れ思（し）はざる。其（そ）の甚（しん）しき乎（や）。夫（そ）れ此（こ）書（か）籍（せき）ハ我（われ）が貸（か）し。以（も）て業（ぎふ）とある所（ところ）の何（なに）なり。故（ゆ）に之（を）を流（りゅう）す。於（お）て頗（ぜん）る。營業（ぎふぎふ）ハ損（そん）害（がい）あり。營業（ぎふぎふ）ハ損（そん）害（がい）ある。於（お）て之（を）の償（あ）金（きん）を要（えい）せざる。可（べ）らば仍（な）て豫（よ）しめ。此（こ）ハ告（つ）白（はく）し。置（あ）くと云（い）ふ。

新稿

長門屋主人識

